



野鳥の 不思議解明 最前線

#74

文 植田睦之

© Japan Bird Research Association, 2011

水田で採食するオオジシギ *Gallinago hardwickii*。本州で中継しているのが観察されているところをみると、秋のオオジシギは小刻みに渡る？ 撮影●岸久司

もしかして単にM？

～中継地を使わずに一気に渡る秋のヨーロッパジシギ～

今年は遅かったツグミもようやくやって来て、まだ数は少ないながら冬鳥が揃ってきました。冬の調査の時期です。夏の調査は日の出前後に調査をはじめようと思うと、それまでに街から調査地に行くのは大変なので、車中泊やテント泊が多くなります。けれども冬は調査開始時間も遅いし、さすがに寒いので、ビジネスホテル泊まりが多くなります。これがデブの素。ホテルの朝食はバイキング形式なので、貧乏性が祟って、不必要にたくさん食べて、ちょっと気持ち悪くまでなってしまいます。こういう食事に限らず、人はどうしても、不必要なことをしてしまうものです。けれども、野外の鳥は（カラスなどの遊び行動を除けば）一般に不必要なことはしないと考えられています。不必要なことをするとそれが死につながってしまうからです。ところが、最新の追跡機器を使った調査でヨーロッパジシギ *Gallinago media* が不必要にも思えるノンストップの渡りをするのがわかってきました。

これまでも、シギ類がノンストップの長距離渡りをするのがハウロクシギ (Driscoll & Ueta 2004) やオオソリハシシギ (Gill et al. 2009) で知られていました。しかしそれらは、海を越える渡りで、迂回して陸伝いに渡るという選択肢はあるものの、最短距離の経路を渡る限りにおいては、「一気に渡らざるを得ない」ものでした。しかし今回、Klaassenさんたちはスウェーデンで繁殖するヨーロッパジシギが渡り経路に中継できる湿地があるにも関わらず、そこに降りずに越冬地のやや北に位置するアフリカ

中部までの4,300～6,800kmの距離をノンストップで渡っていることを明らかにしました。なぜヨーロッパジシギはこんな渡りをするのでしょうか？ 渡り時の気象条件をみても、追い風に乗って一気に渡っているわけではなさそうです。Klaassenさんたちは、繁殖地での食物条件が良いので、脂肪を十分に蓄積させることができるので、捕食や感染症のリスクのある中継地を使わずに一気に渡った方が適応的なのではないかと考えています。ヨーロッパジシギの春の渡りはほぼ同じ経路であるにも関わらず、中継しながら北上していきます。それは、越冬地で十分な脂肪蓄積をするのが難しいので、小刻みに渡っていくのでしょうか？ 一気の渡りが繁殖に差し障るからでしょうか？ それとも到着地がまだ雪に覆われていたりする危険を考えるとリスクを冒せないのでしょうか？ いろいろ想像はふくらみますね。

この研究もそうですが、ジオロケータというわずか1.1gのロガーを使うことで、これまで詳細な渡り経路を明らかにすることが不可能だった中小型の鳥の渡り経路が次々に明らかにされています。ほかのシギ類の渡りのパターンなどを明らかにしてくれば、Klaassenさんの仮説が正しいのか、それともほかの理由なのか見えてくると思います。ここ何年かは次々に発表される渡りの研究に注目ですね。

紹介した論文

Klaassen, R.H.G., Alerstam, T., Carlsson, P., Fox, J.W., & Lindström, A. (2011) Great flights by great snipes: long and fast non-stop migration over benign habitats. *Biology letters* 7: 833-835.